

# WEST PRESS 2



# DISCUSSION WEST meets 永山 祐子

「建築金物はスケールを示すヒントになってしまうので隠したい」。

建築家・梅林克が興味を持つ建築家たちを訪ね、ディテールに対する考え方や設計手法を聞くシリーズ。第2回となる今回は、建築家・永山祐子をゲストに迎え、さまざまなスケールや遠近感、明暗を操作する空間の発想法を聞いた。シーンや行為を元に映画のコマを編集するように建築をつくる永山祐子と、コンテキストから抽出した構造を空間に展開させていく梅林克。考え方が異なる2人に一致する要望は、金物から意味や存在感が消えること。とりわけスケールを視覚的にコントロールする永山の操作に対し、金物の存在感は決定的な影響を与えるという。既製品で対応するには難しい「消すディテール」をいかにつくるか。終盤には西康雄（WEST代表取締役社長）と、「Agaho」「gg」のデザインを手がける寶角光伸（プロダクトデザイナー）も交え、建築家が金物に求める現実的かつ切実なニーズが語られた。

**梅林克** 永山さんは空間を現象や映像のように捉えていて、私や私と同世代の建築家とは発想の方法が違うように見えるし、そこに魅力を感じます。どんなところから発想をスタートするのでしょうか。

**永山祐子** 行為や現象から発想することは多いですね。例えばワンピースを主力商品とする「YLAN YLAN 丸の内店」(2009)の場合、お洋服をぶら下げた情景を最初に想像しました。はじめて手がけた物販店の「ANTEPRIMA六本木ヒルズ店」(2008)では、商品のバッグの色合いにあわせて壁の色にグラデーションをつけています。「お店に入って、出る」という一連の行為を考えて、奥に行くほど明るくなり、高揚感が増すようなことを考えました。

**梅林** 私の場合は現象やコンテキストからダイアグラムを抽出し、その空間構造を重ね合わせて空間化しようとしています。だから、できあがった建物に直接自らの身体が介在しない。僕と永山さんは構造主義と現象学のような違いがありますね。

**永山** 物販店は特に、モノありきで設計しますね。だから、私が設計した店舗は、商品を除くとなんだか間抜けな空間になってしまうんです。でもそのくらいのバランスが良いと思っています。

**梅林** 非完結の空間構造、それと対峙する身体の相互関係が設定されているということですね。

**永山** 私も住宅などの場合は、どんな行為も許容できるようにつくります。時間が経てば使い手が変わることもあるし、どちらかという自分で使い方を見つけてほしいので。

**梅林** 今、どんな建築を設計していらっしゃいますか？

**永山** 栃木県に葬祭場を手がけています。元々日本は自宅葬でしたよね。それが住宅事情から難しくなり、かわりに公民館のような建物を使いはじめ、さらにデコラティブなセレモニーホールに変化したという歴史があります。そうしたあり方を一度解体して、かつて日本家屋にあったような、「普段はふすまや障子で文飾された空間を繋げていって場ができる」という場のあり方を、ホールの空間につなげられないかと考えています。

**梅林** 大きな、新しい「家」なんですね。

**永山** そうですね。従来のような大ホールではなく、たくさんの分節がある空間にしたいんです。全体を7枚の湾曲した壁で構成し、その文飾された空間を串ぎすようにホールなど各機能を与えています。そうやって空間同士をつなげていくので廊下はありません。いろいろな空間が、ところどころに差し挟まれた庭を介して出会うシーンが生まれます。例えば足の悪いおばあさんがいらつしやる場合、ご遺体と接しながらも、ほかのお客さんからは見えない場所に親族の席を用意することもできます。

**梅林** 現象といっても、積極的に方向付けがされている現象ですね。求められる行為が連続してできる全体像がイメージされている。

**永山** 大きな地形から窓枠のディテールまで、わりと一緒くたに考えるので、最初の段階ではスケールがめちゃくちゃなんですよ。

**梅林** はじまりが独特ですね。大時代があったフィロソフィを建築に落とし込むのではなく、日常の行為や思ったことをストレートに空間につなげている点が新鮮です。

**永山** 日常から得たヒントを普遍的なものにつなげて行くような方法から発想するケースは、私の世代の建築家には多いような気がします。その理由を自分なりに整理してみると、おそらく世の中が複雑になって細分化されて、1つのテーマから落ちていく発想では届かない場所が出てくるような印象があります。それよりは細かいものから大きなところに届かせる方が、リアリティがあるのかな、と。

**梅林** ある概念を説明するためにつくるのではなく、イメージをつないでいくうちに木が元気にすくすくと育つようなつくり方ですね。一方で、部分と全体の関係が段階的につながっているわけではなさそうですが、その中でのディテール、このインタビューの主旨では建築金物などはどういう位置づけにありますか？

## ディテールから、意味や存在感を消す方法



Photo: 下林彰子

### 永山 祐子

ながやまゆうこ

1975年東京都生まれ。

98年昭和女子大学生生活美学科卒業。

98-02年青木淳建築計画事務所勤務。

02年永山祐子建築設計設立。

04年中之島新線駅企画デザインコンペ

優秀賞。

05年つくば田園都市コンセプト住宅実施設計競技 二等。

「ルイ・ヴィトン京都大丸店」

JDCデザイン賞2005 奨励賞。

「Kaleidoscopic Real」

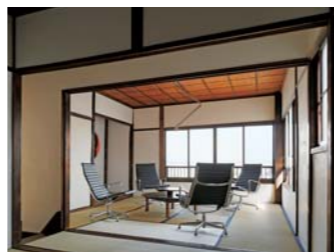
ロレアル色と科学の芸術賞 奨励賞。

06年「丘のある家」

AR Awards(UK) Highly Commended賞。

カヤバ珈琲

昭和13年(1938)に創業し、谷中を象徴する喫茶店・カヤバ珈琲(大正5年築)の改装。同店は平成18年(2006)に一度閉店したが、たいとう歴史都市研究会とSCAI THE BATHHOUSEの協力のもとで復活した。永山は、この建物が持っていた重層的なストーリーを生かしつつ、新しい「視点」をもたらす設計を行った。室内と窓の明暗のコントラストに強い印象を受けた永山は、光のイメージを増幅させるために天井を黒いスモークガラスに張り替え、時間帯や天候、季節によってさまざまな表情を映し出す空間をつくり上げた。突き当たりのニュートラルな光澤も場所に奥行きを生んでいる。東京都台東区谷中6-1-29 Tel. 03-3823-3545 営業時間:午前8時～午後6時 定休日:月曜日(祝日の場合は翌日)



カヤバ珈琲店2F 現代アートの観覧会場になる

1F アーバン・プレム南青山、3F カヤバ珈琲店 設計: 永山祐子



永山 私はスケール感がわからなくなるように空間を操作することが多いんですが、建築金物はスケールを示すヒントになってしまうので、隠す場合が多いです。

梅林 私も金物には、取手や鍵という記号ではなく単なるプレートやバーであってほしいと思っています。例えば、タオル掛けの幅はタオルの幅を意味していますが、そうではなくて、端から端まで一本の棒になっていて、たまたまそこにタオルが掛かっているというように見せたいですね。

永山 やはり金物から意味やスケールが出てしまうのは避けたいですね。例えば片方の面からは見えない彫込取手の場合、ラッチ(つめ)がないものが多いんです。でも見せないことを前提に、奥側に引っ掛ける場所があってラッチが動く、という構造を扉に隠しこめるユニットがあれば、爆発的に売れると思います。

寶角光伸 おさまりが複雑すぎると、今度は現場から施工のしにくさを問われてしまうんですね。

西康雄 存在を消したい、という話はよく伺います。例えば化粧座なしのレバーハンドルで、扉から直接ハンドルが生えているように見せるとか。やろうと思えばできますが、コストや施工のしづらさがネックになります。しかし現代は建物の感じも変わってきていますので、そこは建築家の声を聞きながら回答していきたいですね。

梅林 一つのパーツとしては常識的にはできないことでも、工程の分節方法は多様なので、やりようによっては可能ですよね。

寶角 例えば扉ごと、施工部隊もセットで供給する、という方法もあります。

永山 鍵のバックセットを受けるためにドアを彫り込むことも今は一般化していますが、最初にそういう製品が出たときは複雑なものに見えたはず。施工レベルでつくり方さえ明確ならば可能かな、とも思います。

梅林 最近は床の金物も、上からタイルを埋め込んで仕上げられるようにできていますね。

永山 床の仕上げのための仕様も用意されていますよね。フロアヒンジにも“タイル用”というものがあって、昔はステンレスプレートが見えていたのに枠の線だけが床面に見えるようになっています。

梅林 ドアハンドルなども機構を工夫したり、業者間で連携することで、新しい商品が生まれてほしいですね。

## WEST VOICE

2010年、私たちはEUの商業的・文化的なハブであるオランダを皮切りに、ヨーロッパへの進出を本格的に開始します。オランダは大国ではありませんが、国内のデザイン傾向に偏りがなく、メディアが日本人デザイナーに好意的なもの追風です。ドアハンドルや鍵は、建築の中で人間が日常的に触る、唯一の箇所です。特に2008年にiF賞を受賞したAgaho basisのハンドル(146、148、149)は自信作。ぜひ鍵とセットで、世界中の人びとに使っていただきたいですね。

WEST代表取締役社長 西康雄・談

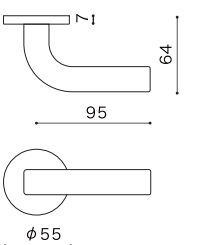
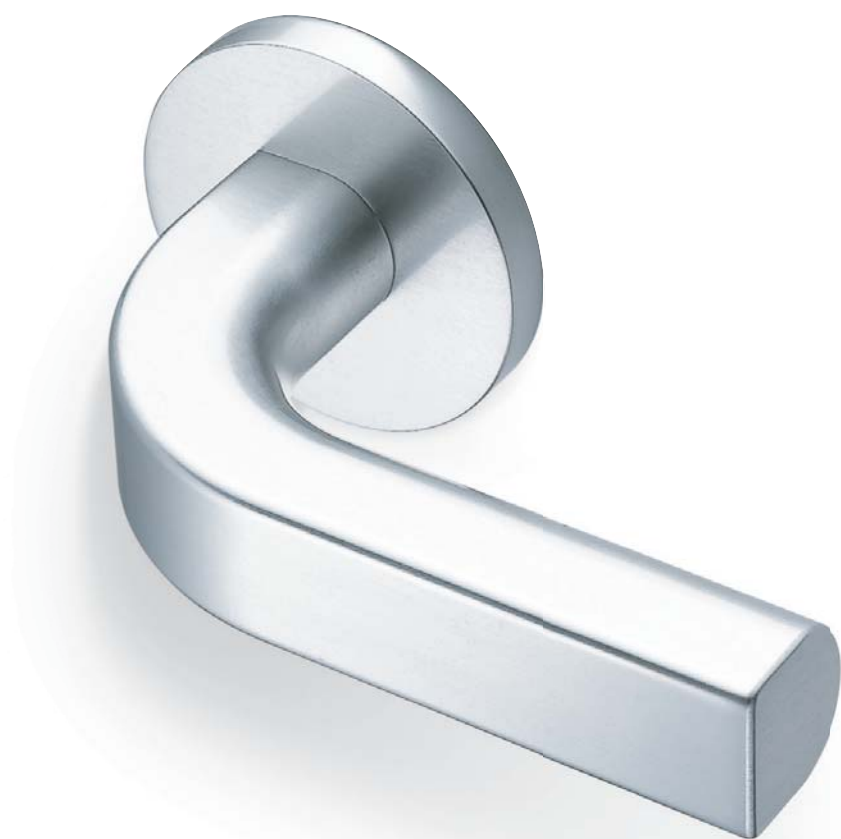
Next  
WEST meets アトリエ・ワン

生島文庫(2008)

写真提供:アトリエ・ワン



## 99 Lever Handle 216



## WEST CORPORATION

TOKYO OFFICE / SHOW ROOM  
SHIBUYA MINAMI TOKYU BLDG.1F  
3-12-18 SHIBUYA, SHIBUYAKU, TOKYO, 150-0002 JAPAN.  
TELEPHONE: 03-3499-9260 FACSIMILE: 03-3499-9263

OSAKA OFFICE / SHOW ROOM  
YODOYABASHI YAMAMOTO BLDG.1F  
4-3-22 IMABASHI, CHUOKU, OSAKA-CITY, OSAKA, 541-0042 JAPAN.  
TELEPHONE: 06-6221-5777 FACSIMILE: 06-6221-5888

## 株式会社ウエスト

東京オフィス/ショールーム  
150-0002 東京都渋谷区渋谷3丁目12番18号  
渋谷南東急ビル1F  
TEL: 03-3499-9260 FAX: 03-3499-9263  
WEST PRESS 担当: 荻山

大阪オフィス/ショールーム  
541-0042 大阪府大阪市中央区今橋4丁目3番22号  
淀屋橋山本ビル1F  
TEL: 06-6221-5777 FAX: 06-6221-5888  
WEST PRESS 担当: 笠井

## WEST PRESS 2

2010年1月10日発行

Art Direction:  
藤脇慎吾  
Text:  
平塚桂(はむ企画)  
Photo:  
繁田諭(Nacása & Partners Inc.)  
Editor:  
publica